

映像を用いた実践共有の課題と可能性 —日本語中級クラスにおけるインタビュー・プロジェクトの映像化から—

瀬尾 匡輝*・瀬尾 悠希子**

(2018年10月1日受理)

Difficulties and Possibilities of Sharing Teaching Practices with Video: A Case of Project Work in an Intermediate Japanese Language Class

Masaki SEO* and Yukiko SEO**

(Received October 1, 2018)

要旨

本稿では、筆者らが留学生に向けて行った日本語授業を撮影し、それを分析したうえで56分の映像作品として編集し、公開する。映像化した作品では、教科書の日本文化紹介に興味を持った学習者が、プロジェクト活動を通してどのように本質主義的文化観を乗り越えられていたのか、また乗り越えられていなかったのかを描き出す。そして、実践の映像化の過程に注目し、実践を映像作品に編集し、公開・共有することの意義と課題を議論する。

【キーワード】映像による実践の公開・共有、フィールドワーク、記録のための撮影、実践の映像作品化

1. はじめに

南出・秋谷(2013)によると、フィールドワークにおけるビデオカメラの活用法には、観察のための撮影と記録のための撮影があるという。観察のための撮影では、フィールドワークのデータ収集や分析を目的にビデオ録画を行う一方で、記録のための撮影では、フィールドワークで撮影した映像を映像作品として編集し、それを上映するという目的に重きが置かれている。言語教育研究の論文においては、これまで専ら前者のデータ収集や分析のためにビデオ撮影が行われ、分析結果は文字や写真などの形で示されてきた一方で、分析のために使用された録画データが編集され上映されることは少ない。だが、文字起こしされたデータや一瞬だけを切り取った写真では、実践者や

*茨城大学全学教育機構 (〒310-8512 水戸市文京 2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan)

**獨協大学国際教養学部言語文化学科 (〒340-0042 埼玉県草加市学園町 1-1; Department of Interdisciplinary Studies, Faculty of International Liberal Arts, Dokkyo University, 1-1 Gakuen-cho, Soka-shi 340-0042 Japan)

学習者の表情やジェスチャー、教室内のやりとりなど実践が行われる場の雰囲気や臨場感を描きだすうえで大きな限界がある。場の雰囲気や臨場感を伝えるためには、映像を用いることが最適であり、人々が簡単に映像を録画・編集・公開できるようになった昨今においては、記録のための撮影を基にした実践共有や公開の可能性を追求していく必要があるだろう。そこで、本稿ではその足掛かりとして、筆者らが留学生を対象とした日本語授業を撮影し、それを分析したうえで56分の映像作品として編集、公開することで、映像による実践・研究の共有の課題と可能性を議論する。

2. 映像作品で紹介する実践の概要

本稿では、筆者らが茨城大学の日本語中級授業で行ったプロジェクト活動を映像作品にまとめ、公開する。撮影したプロジェクト活動では、受講生達が普段疑問に思っていることについて関係者にインタビューし、そのデータを持ち寄り、解釈について議論をしたうえで、最終的にポスター発表として学内の人々に向けて発表した。プロジェクト活動の流れを表1に記す。

表1 プロジェクト活動の流れ

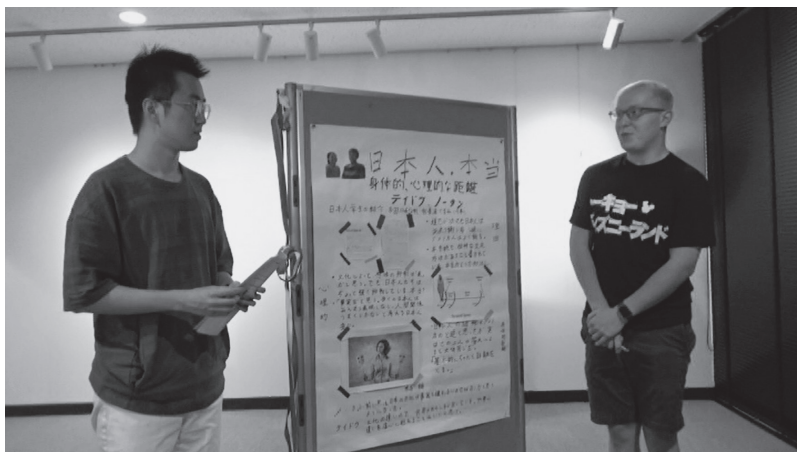
1回目	ペアでテーマを考え、インタビューの質問を作成する。
授業外	インタビューを実施する。インタビューは15分程度のビデオにまとめる。
2回目	ビデオ（インタビューデータ）を授業で鑑賞し、データの解釈について話し合う。
3回目	評価について話し合う。ポスターの内容を考える。
4回目	ポスターを作成する。
5回目	ポスター発表会

活動には、アメリカ、中国、タイからの交換留学生6名が参加した。動画を撮影する際には、ビデオ撮影及び公開の同意書を用意し、署名してもらった。そして、本稿で映像を公開するにあたり、各協力者に映像を視聴してもらい、公開の許諾を得た。

映像化した作品では、教科書の日本文化紹介に興味を持った学生達が、プロジェクト活動を通してどのように本質主義的文化観を乗り越えられていたのか、また乗り越えられていなかったのかを描き出す。撮影は、実践者のうちの一人が1台のカメラで行った。そして、実践のビデオ録画を文字起こししたものを読み込み、かれらに焦点をあて分析し、一つの映像作品に編集した。

3. 映像作品

映像作品をこちらから視聴いただきたい。<https://youtu.be/1Y5jyvIVfxE>



4. 実践を映像化する際の課題と映像化することの意義

実践を映像化するには次のような課題があった。たとえ映像がその場を映し出すといっても、フレームで撮れる範囲は限られており、視聴者に見せるためのテーマやフォーカスを定める必要がある（清矢，2001）。だが、実践を行っている最中はどこに焦点を当てて撮影するのかを定めることは難しかった。本実践開始当初は、1台のカメラで学習者3組を満遍なく撮影していた。なぜなら、授業の実践は複雑かつ豊かであるため（佐藤，1997）、その時点では実践のどこを切り取って共有すればよいか絞ることができなかつたからである。焦点を定めはじめたのは、3回目の授業で、ある1組の学習者の意見が互いにかみ合っていないことに気づいたからだった。筆者らは、ひとまずこのペアを中心に撮影を進め、最終的に2人の葛藤はプロジェクト活動の目的であった日本文化に対する本質主義的見方を見直すということをふりかえるうえで適していると考えたため、この2人を中心に実践を映像化することにした。仮に別のペアを中心に撮影していたら、本プロジェクトの目的をふりかえるのに適した映像が必ずしも撮れていたかどうかわからない。焦点をしぼるということはその他の情報をいったん捨て去るということである。映像を用いないフィールドワークでも同様の問題はあるが、映像を撮り最終的に映像を作品とする場合は、撮影していない部分は映像による記録と共有ができないため、さらに大きな課題となると考えられる。

また、実践者自身がビデオ撮影することの難しさが指摘できる。本科目は2名の教員が週に1回ずつ授業を担当していた。瀬尾悠希子が授業をするときは、瀬尾匡輝がビデオ撮影を行っていた。しかし、瀬尾匡輝が授業を担当するときは事情により瀬尾悠希子が授業に参加できなかったため、瀬尾匡輝はカメラを片手に一人で撮影しなければならなかった。授業と同時に撮影しているため、学習者とやりとりをしながら撮影に集中することは困難であった。また、撮影よりも教育を優先するため他の学習者のほうに行かなければならないことも多く、焦点を当てることにしたペアを撮影できないこともあった。だが、やりとりを間近で撮影することができたため、ある意味躍動感のある映像にすることもできた。

さらに、映像であるがゆえに匿名性が守られないという問題もある。文章のみによる論文であれば、参加者の名前や場所を仮名にしてプライバシーを保護することができる。しかしながら、映像ではそれが難しい。そのため、個人情報への配慮をどうするかという問題は一層大きくなる。

では、教育実践を映像作品化することには、どのような意義があるのだろうか。実践者自身が映像を作品化する場合、作品化するまでに経る映像の観察・分析という過程は、多角的な視点からの実践のふりかえりを促す。例えば、筆者の一人は2回目の授業終了時に記したフィールドノートに、学習者はインタビューで得た回答を自分の考えに合わせて解釈しているのではないかと書いた。だが、作品化するために映像を何度も見返すうちに、学習者がインタビューで3分近く自身の意見を述べていることに気づいた。そして、インタビューを受けた日本人学生は学習者の冗長とも言える意見開示に影響を受け、学習者の考えに沿った回答しか述べなかつたのではないかと思うようになった。筆者らは、学習者のインタビューの解釈のしかたに問題があるのではないかという考えからプロジェクト活動でデータセッションを行っていたが、インタビューの方法を学習者に伝えていくことの重要性にも気づくことができたのである。映像は、実践者の記憶やフィールドノートには残されていない情報も鮮明に記録する。作品化の過程でこのような映像を何度も見返し、そこに映されていることを分析することによって、より多角的な実践のふりかえりが可能になる。そして、この多角的なふりかえりこそが、実践をめぐる教師の認識の枠組みを拡張し、教師の知を豊かにするのである。

実践を映像化することの意義は単に自身の実践とより深く向きあえるようになることだけではない。清矢 (2001) は、ビデオを用いたフィールドワークは異なる立場の人々が同じ場面を視聴することを可能にし、対話を促すきっかけになるという。また、たとえ同じ映像を視聴したとしても、映像を見る人の社会的、個人的文脈によってはイメージの解釈が異なるため、一つの映像から思わぬ偶然を見つけたり、視聴者間の社会的な協働を促進したりすることもできるという (バンクス, 2016)。つまり、実践を映像化し、共有することで、同じ場面をより多角的に捉えることが可能になり、協働的な批判的省察の深まりが見込まれるのである。だが、このような他者とよりよい実践に向けたやりとりをすることは、これまで教育現場では多く行われてきた (佐伯他, 2018)。例えば、教育実習において実習生の授業実践をビデオ録画し、それを実習指導担当教員や他の実習生達と視聴することは教員養成課程では当たり前のように行われる活動だろう。だが、本実践の映像化では収集したデータを映像作品として上映する「記録のための撮影」(南出・秋谷, 2013, p. 65) に重きを置いており、文字や写真ではない方法で実践を描きだし、それを論文誌に掲載した。そうすることで、教師教育の場や職場といった限定された人々のみと実践を共有するのではなく、映像による実践共有をより広く開いていくことを試みている。とはいえ、本実践の映像化は、映像を公開したところで留まっており、共有の結果、視聴者や実践者にどのような変化が生じ得るのかはまだ考察できていない。今後は本映像を視聴した人達や実践者にとってどのような学びがあり、どのように映像の共有を通してよりよい実践に向けた対話ができるのかを検証したい。そして、実践の協働的な批判的省察をより開かれた営みとすることを目指していきたい。

引用文献

- 佐伯胖・刑部育子・苜宿俊文 (2018) 『ビデオによるリフレクション入門—実践の多義創発性を拓く』 東京大学出版会
- 佐藤学 (1997) 『教師というアポリアー反省的实践へ』 世織書房
- 清矢良崇 (2001) 「研究者が AV 機器を用いるのはなぜか」 石黒広昭 (編) 『AV 機器をもってフィールドへ—保育・教育・社会的実践の理解と研究のために』 新曜社, 29-46.
- バンクス, マーカス (2016) 『質的研究におけるビジュアルデータの使用』 新曜社
- 南出和余・秋谷直矩 (2013) 『フィールドワークと映像実践—研究のためのビデオ撮影入門』 ハーベスト社